中国美術学院「書法専業創辦四十周年」および「創立七十五周年」の記念行事について

河内利治（君平）

二〇〇三年十一月二十一日（金）は、小雨の西泠印社百周年の開幕式とはうって変わって、秋空澄みわたる快晴であった。南山路に面した唐雲芸術館で、「中国美術学院書法専業創辦四十周年回顧展」の開幕式が催された。許江（現中国美術学院院長）、潘公凱（前院長・現中央美術学院院長・潘天寿ご令息）らが祝辞を述べられた。故陸維釗先生夫人がご高齢をおして出席されていたのが特に印象的であった。テープカットの後、「回顧展」を参観した。四十年の歩みを、写真などの歴史資料を用いて紹介し、あわせて歴代教員ならびに現教員と大学院生の書画作品を展示していた。

「回顧展」参観後、徒歩五分ほどの柳鶯賓館に場所を移動し、「国際高等書法教育論壇」の開幕式が行われた。この席上で、最初に挨拶に立たれた劉江先生（中国美術学院教授）が、潘天寿院長の支持のもと一九六二年に中国初の書法専業が発足したこと、その当時事務所には机二つと電話一台しかなかったこと、七九年に中国初の院生五人（朱関田・王冬齢・邱振中・祝遂之・陳振濂）を入学させたこと、陸維釗先生・沙孟海先生・諸楽三先生・方介堪先生・朱家済先生らが苦難の時代を乗り越えてこられたこと、その最中に陸先生が逝去されたことなどを話され、感極まって涙ぐまれた。章祖安教授、李嵩先生（元教務処処長）、許江院長が次いで挨拶された。

このたびの四十年を記念する書籍二冊《高等書法教育四十年》・《国際高等書法教育論壇論文集》が、中国美術学院出版社から「学縁文叢」として出版された。ともに祝遂之主編である。

《高等書法教育四十年》は、副題に「中国美術学院書法専業史料集」とあるとおり、高等教育の貴重な史料集である。文献選編、教学档案、名師文存、回憶文章、学書漫録、図片選編、作品選編、附編の八部構成からなる。

なかでも文献選編は、「沙孟海先生兼課報酬単原件影印」など眼にすることなど思いもしない挿図がある。教学档案や名師文存は、書道教育に従事する者にとっての最高の思考材料である。

回憶文章には、沙孟海・潘公凱・劉江・章祖安・柳曽符・駱恒光・兪建華・王个簃・王蘧常・啓功・祝遂之・諸涵・汪済英・林剣丹・金鑒才・汪星燦のほか、河内利治「回憶与交流—我和浙美書法系之縁」、前田秀雄「湖畔学書雑記（節録）」、藤井義秀「回憶留学生活」を収録する。

図片選編は、1歴史留痕、2教学剪影、3建系集影、4対外交流の四部構成ですべて写真である。作品選編も、1名師名作、2名師手迹、3尺牘往来、4師生作品の四部構成ですべて写真と図版である。1と2は潘天寿・陸維釗・沙孟海・諸楽三・朱家済・方介堪ら歴代教員の作品である。

附編も貴重な文章である。中国美術学院書法系大事年表ほか、潘天寿・陸維釗・沙孟海・諸楽三・方介堪の年表、歴届卒業生簡況、歴届卒業生名録を収録する。

上述した「回顧展」に展示されたものとほぼ同じ写真や図版が収録される書籍である。

《国際高等書法教育論壇論文集》は、王冬齢・陳振濂両教授の下で開かれた「国際高等書法教育論壇」の論文集である。薛永年（中央美術学院）・邱振中（同上）・劉涛（同上）・姜澄清（貴州大学）・黄惇（南京芸術学院）・華人徳（蘇州大学）・曹錦炎（上海博物館）・曹宝麟（暨南大学）・柳曽符（復旦大学）・葉培貴（首都師範大学）・駱恒光・兪建華・金鑒才らが発言した。劉江・章祖安・祝遂之・蔣進・陳大中・韓天雍ら中国美術学院の現教員が出席したことは言うまでもない。日本からは、堀幹夫（岐阜女子大学学長）、吉澤龍二（同教授）、木本南邨（高野山大学教授）と河内が出席し、《論文集》には、日本人では、梅舒適「高僧的墨蹟」、中村重勝「日本的大学書法教育」、木本南邨「小坂奇石先生的書斎用品考」、河内利治「日本、中国、中国台湾地区的大学書法教学現況之比較研究——大東文化大学、中国美術学院和台湾芸術大学的課程表的分析」、安藤文夫「回憶青山杉雨先生」、吉澤龍二「従作品来看日比野五鳳《雛》的魅力」が収録される。

議論の過程で、論点は「専門性」と「総合性」、「技を育てるか」それとも「人を育てるか」に集中したように感じた。書法は「人」の「技」によって成り立つ芸術である。総合的に人間教育を行い、専門的な知識と技術を教育することが、教育目標であり理念であることは、今も昔も変わりないはずである。それゆえ両者が「通」ずるように育てることが、何よりも大切なことであろう。今後、中国美術学院がどのような方向の教育に進むのか、草創期の留学生として、交流を持つ大学の教員として、看過できない一大関心事である。

翌二十二日（土）の朝も秋晴れの心地よい日であった。

「中国美術学院院慶七十五周年」という式典にあわせて、二年余の時間をかけて校舎を建て替えた。南山路に面する旧敷地内に、現代建築の校舎が落成したのである。素直に嬉しかったのは、本科生・院生ら校友しか記念品をもらえないと

思っていたところ、外国人進修生の名簿があり、筆者にも次の記念品を下さったからである。愛校心が自然と湧いてきた。「二〇〇四伝薪—歴任院長作品選カレンダー」、鄭長編「芸海詩風—国立芸専詩選」中国美術学院出版社、焦小健・楊樺林編「与歴史同行」中国美術学院出版社、盧坤峰著「林菸盧詩草」の四つである。また北京郵票廠製「中国美術学院建校75周年暨南山新校園落成記念」が発売されており、50元で購入した。

一九二八年創立から数えて75周年を祝う「慶典大会」が九時から小劇場で開催されたが、筆者は邱振中・劉涛両氏と一緒に、祝遂之・蔣進両氏の案内で新校舎を見学して回った。「校史陳列室開館暨中国美術学院校友・教師捐贈作品展」、書法系の教室、現代書法研究中心の部屋等を見学した。図書館長室から見える西湖の風景が絶品であった。

西泠印社は文人の聖地であり、中国美術学院は教育の学府である。その両機関の重鎮であった沙孟海先生、劉江先生をはじめとする多くの先生がたとの出会いより、中国の文人かつ教育者という人物像に憧れ、それを目指して今日に至っている、そんな思いを今回あらためて強く抱いた。その劉江先生から別れ際に、『祝西泠印社百年華誕〈百印賀西泠〉劉江篆刻作品集』を頂戴した。刻印を忘れるなという励みとして受けとめている。

二〇〇三年は、筆者の関係する大学の創立記念行事が相次いだ。母校の筑波大学が三十年、勤務先の大東文化大学が八十年、中国美術学院が七十五年と四十年と四つも重なった。そして西泠印社が百年である。五年または十年ごとに、記念行事は繰り返されるであろうが、今般は特別な記念であり、意を新たに勉学に勤しまなければならないと思う。

二十一世紀の中国書法芸術教育界をリードする人物は、一体誰であろうか。おそらく陳振濂氏はその一人であろう。西泠印社と中国美術学院の両方の国際会議を運営し成功させたからである。

最後に、国立芸術院、国立芸専、浙江美術学院、中国美術学院と校名は変更しても、文人かつ教育者養成の学風は継承して欲しいと切に願う。

【付記1】本稿は、今井凌雪主幹『新書鑑』誌三四二号・三四三号（二〇〇四年一月号・二月号）所収の拙稿「癸未杭州客話—西泠印社百年社慶と美院書法四十年」から一部抜粋し改編した文章であることをお断りしておく。

【付記2】次頁以降に、中国美術学院出版社《高等書法教育四十年》（二二七頁～二三五頁）に収録される「回憶与交流—我和浙美書法系之縁」の日本語版「回想と交流——浙江美術学院国画系書法篆刻班留学の回想および中国美術学院書法系と大東文化大学書道学科との国際交流」を掲載しておきたい。この文章は、河内が二〇年前に浙江美術学院に留学した時に受講した授業や、現書道学科開講科目の一つ「書道文化演習2〈海外〉」を実施した記録などを記したものである。将来、留学を考える学生諸君にとっては、一つの指針となると思う。